

第 3 回文化発信戦略に関する懇談会 議事録

日時:平成 20 年 2 月 25 日(水曜日)15:00～17:00

場所:文部科学省 東館 3F1 特別会議室

出席委員 池上委員, 北川委員, 久保委員, 扇田委員, 竹本委員, 遠山委員, トーザン委員, 福原委員, 森口委員, 山内委員, 山崎委員

(事務局からの資料説明の後, 外務省から資料説明, 北川委員から意見発表。その後, 各委員から御発言)

(外務省山本広報文化交流部長から海外交流審議会答申について説明)

- 日本は一般的には国際社会で評判がよいが, 評価が定着しているわけではない。その一方で, オピニオン・リーダー, 有識者, 政策決定者の間での日本の存在感は極めて小さい。
- 先進国間では, 戦争がなくなってきており, 経済面についてもルールに基づいて問題解決をしていくので, 国の存在感を認めてもらうには, 一般の国民の間でどのように理解し親近感をもってもらうかが重要である。そのために, 政府だけでなく, 様々な主体が一体となって取り組む必要がある。
- 具体的には BBC に匹敵するようなテレビ国際放送, 日本語教育拠点の充実, ポップカルチャーなどの現代日本文化の発信や文化交流貢献者の顕彰, 有識者に対する発信の支援の 4 つの分野で提言がなされており, 外務省としても各種施策を実施していきたい。

(北川委員から意見発表)

- 地域とつながることによって文化的な関心を掘り起こそうとする取り組みについて話をしたい。
- 越後妻有トリエンナーレは 3 年に一度行うアートの国際展であり, 新潟県が長野県と接する過疎に陥っている地域で行っている。一昨年の第 3 回目のトリエンナーレでは 35 万人が訪れた。
- 1500 年もの間, 農業を通して大地と関わってきた地域の再生のために, アートを活用しようとした。
- 1996 年に開始したが, はじめは地元の方々の賛同は得られなかった。しかし, 口コミによりトリエンナーレへの観客が増え, アーティストやサポーターがその土地に敬意を表したので, 次第に地元の方々も協力してくれるようになった。
- アーティストは, 地域の雰囲気や特色をアートで形にし, 来訪者は, 情報量が膨大であることや情報に最短でアクセスできることが価値のあることではない世界を体験する。アートによるその地域の魅力の発見やアートによる労働機会の創出がいろいろな人々を呼び込み, 皆を元気にしている。
- 廃校や中越地震で廃屋になった家にもアーティストや建築家が入り, 建物を再生したり, 活用したりしている。また, 3 年に 1 回の展覧会だけでなく, 棚田のオーナー制度や産直等もうまくいっている。

○ 今後、大阪の水都大阪 2009 や、新潟の水の芸術祭など、水をテーマとした取組が企画されている。後者は土と水という地域に根ざした素材を見直して、外国のアーティストたちと共同展を行うものである。

○ 日本では、明治維新以来、展示・管理されるものだけを芸術として扱ってきた。里山、お祭り、食、インテリアなど生活の中に生きているものを文化芸術として捉えなければならない。

（各委員からの発言）

○ 外国の知識人の中で日本の存在感が皆無に等しいということを痛感している。

○ 現在も海外放送は日本の発信に大きく貢献しているが、今後は、BBCに匹敵する形で発信していく必要がある。

○ 日本人は余り表彰を好まないが、日本を理解して、日本のために発信してくれる方をしっかり表彰することは必要である。

○ 外国の知識層の間で日本の認知度が足りないということは、ビジネスの世界でも感じる。トップレベルがしっかり発言していなくてはならない。

○ 日本に来ている留学生は非常に多いので、同窓会をつくって、帰国後も情報提供するなどつながりを持ち続けるとよい。また、留学期間中にも、日本の文化に関する情報提供を行えば、将来、日本ファンが増える。

○ 国際的な場でも発言できる子供達を育成するためには、外に目を向けることができる小中学校の教師を育成する必要がある。

○ 日本語教師の育成には緊急に取り組むべきである。

○ 日本では功成り名を遂げてから表彰されるのが通例であるが、より若いときに表彰して励ますことが必要である。

○ 地方のアーティスト・イン・レジデンスのプログラムの課題は、受け入れてサポートする人材が十分に確保できないことである。国内都市間のアーティストやキュレーターの交流を支援したり、国際的に影響力のある海外のアーティスト・イン・レジデンスに日本人を派遣するなどして、戦略的に人材育成を行う必要がある。

○ 文化発信にとっては、政治の役割も重要である。

○ 越後妻有トリエンナーレ、直島、屋久島などはフランス人の間でも非常に話題になっているが、日本においてもフランスにおいても情報が非常に少ない。もっとアクセスしやすい場所で、外国語による十分な情報を提供する必要がある。

○ フランス語も日本語も中国語という共通の競争相手が出現しており、日本語の普及のためには、日本語をもっと気軽に勉強できる場所が必要である。

- 日本人の知識階層の文化度をどう高めるかを考える必要がある。
- 勲章については、もっと若い世代に出すことが必要である。
- 文化庁でやっている大きな催事というのは国際的な影響力がない一方で、越後妻有トリエンナーレや直島は国の支援がなくても成功している。
- アーティスト・イン・レジデンスについても、京都市立芸術文化センター(明倫小学校跡地)では政府の支援がなくても運営できるようなシステムを取っている。お金をかけないでもできる方法を研究する必要がある。
- 日本の文化は多層的で、他国の文化とは異なるので、同じ土俵で文化戦略を比較しない方がよい。
- 海外で日本文化の紹介の活動をしようとしても、各省に権限がまたがっていてうまく連携が取れていないために非常に苦勞する。統一的な決定権のある行政システムを作ってもらいたい。
- 発信ということも大切であるが、次の世代の若者たちが自分の国の文化に自信を持てるように、もう一度教育に力を入れ、新しい芸術を生み出せるような日本にする必要がある。
- 地域文化の在り方は、自然に地域が文化を生んでいた時代、その後の、文化が中央集権化して後家のがんばりで文化を創っている人がいる時代を経て、現在は、外部の人が地域に入ってきて地域と文化を接触させる時代になってきた。
- 海外の知識人に対する広報が大切になってきたということには賛同するが、実際には、そのための取組はなかなかうまくいっていない。例えば、政府広報についても、役所間の壁などがまだあり、それを破っていく必要がある。
- 外国では学者にとっては、翻訳という仕事があまり評価されないため、日本の知的な出版物を外国に出していくためには翻訳者を確保することが重要である。
- 外務省と文化庁はもっと腹を割って文化発信のために議論し、連携する必要がある。